

〔参考資料〕

二豊大名の変遷状況と

各藩の出自と系譜

橋 本 操 六

大分県においても県史編纂の機運がようやく起り、県地
方史研究会としてもこの事業に協力する意味で、藩政史の
解明にとりくむことになり、この特集号を計画した。

二豊大名は、他にくらべて複雑な様相を呈しているため、
今後の研究に当たっての参考資料として、大名の変遷と出自、
系譜を収録した。

二豊大名の変遷

大友氏滅亡後、二豊は小藩に分割統治されることになっ
た。

文禄三年以後の状況は次のとおりである。

興三九万五〇〇〇石↓寛永九年小笠原長次八万石
↓元禄一一長胤除封、同年小笠原長円新封四万
石↓享保元年長胤除封↓享保二年奥平昌成十万
石(普代)↓幕末

龍 王日寛永九年松平重直三万七〇〇〇石↓寛永二十年
英親の時重長に三〇〇〇石、直政に二〇〇〇石
分与↓正保二年英親杵築に移封↓廃藩

安 岐日熊谷直陳八万石↓慶長五年直陳除封、廃藩

高 田日竹中重成一万石↓慶長一〇年重成一万石を加封

計二万石↓同年府内に移る、廃藩

富 来日垣見一直二万石↓慶長五年一直除封↓廃藩

亀 川日寛永十一年松平(大給)忠昭二万二〇〇石↓

寛永十二年中津留へ移る↓廃藩

杵 築日寛永九年小笠原忠知新封四万石↓正保二年松平

英親三万二〇〇〇石↓幕末(譜代)

日 出日慶長六年木下延俊三万石↓寛永十九年俊治の時

延次に五〇〇〇石を分与↓幕末(外様)

中津留日寛永十二年松平(大給)忠昭二万二〇〇石↓

中 津日黒田長政十八万一九〇〇石↓慶長五年細川忠

寛永十九年富岡へ移る↓廃藩

富 岡日寛永十九年松平（大給）忠昭二万二〇〇〇石↓

万治元年忠昭府内へ移る↓廢藩

府 内日早川長政二万石↓慶長五年長政除封↓慶長一〇

年竹中重成二万石↓寛永十一年重次除封、日根

野吉明二万石↓明曆二年吉明除封↓万治元年松

平（大給）忠昭二万二〇〇〇石↓延宝四年近陣

の時近鎮に一〇〇〇石と新墾田五〇〇〇石、近良

に新墾田一〇〇〇〇石を分与、残二万一二〇〇〇石

↓幕末（譜代）

森 日慶長六年来島（久留島）長親一万四〇〇〇石↓

明曆元年清明の時通貞に一〇〇〇〇石、通迺に五

〇〇〇石を分与、残一万二五〇〇〇石↓幕末（外様）

隈 府日毛利高政二万石↓慶長六年高政佐伯に移る↓廢

藩

日 田日元和二年石川忠総六万石↓寛永一〇年忠総下総

佐倉に移封↓廢藩

天和三年松平直矩七万石↓天和三年忠矩出羽山

形へ移封↓廢藩

岡 日中川秀成七万石↓幕末（外様）

日 杵日太田政之六万五〇〇〇石↓慶長五年政之除封、

稲葉貞通五万石↓幕末（外様）

佐 伯日八長門萩藩支封↓慶長六年毛利高政二万石↓幕

末（外様）

以上、高柳光寿、竹内理三編、角川第二版日本史辞典に

よる。

◇

中 津日天正十五年黒田孝高十二万石↓慶長六年細川忠

興三五万九〇〇〇石↓寛永九年小笠原長次八万

石↓享保二年奥平昌成十方石↓幕末

時枝領日元禄十一年小笠原長宥五〇〇〇〇石↓幕末

竜 王日寛永九年松平重直三万二〇〇〇石↓一時豊後高

田に移り正保二年杵築転封廢藩

宇佐宮領日正保三年一〇〇〇〇石↓幕末

島原領日寛文九年松平忠房二万八〇〇〇〇石（豊前一万三

五五〇〇石、豊後一万四〇〇〇〇石）↓幕末

岡 日文禄三年中川秀成六万六〇〇〇〇石↓幕末

日 杵日文禄三年福原直高五万石↓慶長二年太田一吉三

万五〇〇〇〇石↓慶長五年稲葉貞通五万石↓幕末

佐伯川(天正十五年隈城二万石毛利高政)↓慶長六年

毛利高政二万石↓幕末

府内川文禄三年早川長敏六万石↓慶長二年福原直高十

二万石↓慶長四年早川長敏二万石↓慶長六年竹

中重利二万石↓寛永十一年日根野吉明二万石↓

万治元年松平忠昭二万二〇〇石↓幕末

杵築川文禄三年杉原長房↓慶長二年早川長敏↓慶長四

年細川忠興六万石↓寛永九年小笠原忠知四万五

〇〇〇石↓正保二年松平英親三万二〇〇〇石↓

幕末

安岐川文禄三年熊谷直陳一万五〇〇〇石↓慶長五年関

が原役に滅亡廢藩

富來川文禄三年寛家純二万石↓慶長五年関が原役に滅

亡廢藩

高田川文禄三年竹中重利一万五〇〇〇石↓慶長六年府

内に転封廢藩

寛永十六年松平重直↓正保二年松平英親木付転

封廢藩

日出川慶長六年木下延後二万五〇〇〇石(うち五〇〇〇)

石立石分封)↓幕末

森川慶長六年久留島康親一万二五〇〇石↓幕末

亀川寛永十一年松平忠昭二万二〇〇〇石↓同十二年

大分郡中津留転封廢藩

中津留川寛永十二年松平忠昭↓同十九年高松転封廢藩

高松川寛永十九年松平忠昭↓万治元年府内転封廢藩

肥後領川慶長六年加藤清正二万三〇〇〇石↓寛永九年細

川忠利二万三〇〇〇石↓幕末

延岡領川正徳二年牧野成央二万石↓延享四年内藤止樹二

万石↓幕末

天領川天正十五年日田を天領とす↓文禄三年宮木長次

↓寛永十六年代官小川政重、小川政辰↓貞享三

年小川藤左衛門尉、小川長左衛門尉↓幕末

以上は、渡辺澄夫著「大分県の歴史」による。

◇

岡川中川秀成七万石↓幕末

臼杵川文禄三年福原直高↓慶長二年太田重正↓慶長五

年稲葉貞通五万石↓幕末

佐伯川毛利高政二万石↓幕末

府 内川文祿三年早川長敏↓慶長二年福原直高↓慶長四

年早川長敏↓慶長六年竹中重隆↓寛永十一年日

根野吉明↓万治元年松平（大給）忠昭二万五〇〇石↓幕末

〇〇石↓幕末

日 出川木下延俊三万石、寛永十九年より二万五〇〇〇石↓幕末

木 付川慶長元年杉原長房↓慶長二年早川長敏↓慶長四

年細川忠興六万石（城代松井康之、有吉立行）

↓慶長十六年杉原長房↓寛永九年小笠原忠知四

万石↓正保二年松平英親三万二〇〇〇石↓幕末

（正徳二年八月木付を杵築に改める）

森 川来島（久留島 越智）康親一万四〇〇〇石（慶

長十九年以降一万二五〇〇石）

高 田川文祿二年↓慶長六年竹中重隆、寛永十六年↓正

保二年松平重直、英親三万七〇〇〇石

寛文九年↓幕末、島原領（豊前一万三五四〇石、

豊後一万四〇五〇石）

立 石川寛永十九年から木下延次五〇〇〇石（日出より

分封）

亀 川川寛永十一年↓十九年松平（大給）忠昭二万二二

〇〇石

高 松川寛永十九年↓万治元年松平忠昭、貞享三年代官

日田丸山川（永山布政所）（慶長六年ごろ小川光氏）

元和二年↓寛永十年石川総輔↓寛永十六年小川

政重、政辰（永山布政所代官）天和二年↓貞享

三年松平忠矩七万石↓以後代官

肥後領川（高田手永、関手永、野津原手永、久住手永）

慶長六年加藤清正二万三一〇六石↓寛永九年細

川忠利二万三四三四石↓幕末

延岡領川（大分郡の一部、西国東郡の一部）

正保四年内藤正樹二万五〇〇石↓幕末

中 津川天正十五年黒田孝高↓慶長五年細川忠利↓寛永

九年小笠原長次八万石↓元禄十一年小笠原長円

四万石↓享保二年奥平昌成十万石↓幕末

龍 王川小倉の支城、慶長八年細川忠興入城隠居、寛永

九年↓十六年松平重直、明暦二年日田代官支配

↓幕末

宇佐神領川正保三年徳川家光一〇〇〇石寄進↓幕末

時枝領元禄八年小笠原長宥↓幕末

以上は、半田康夫、富来隆共著「大分県の風土と沿革」による。

諸氏系譜

廃藩置県当時、二豊を支配した大名の出自、系譜等を掲ぐれば次のとおりである。

豊前中津藩（河出書房 日本歴史大辞典）

奥平氏。その出自に關しては、一説に武蔵七党兒玉党の一員で、片山余二行時の孫三郎経氏が上野国甘楽郡奥平村に住んで奥平氏を称すといひ、あるいはまた村上源氏赤松氏の流で安芸国住人赤松太郎則清は東国に下り、二子則景は兒玉朝行の婿となり、上野国奥平村に住んで奥平を号し、その孫定家の子貞俊が三河国設楽郡作平に移ると伝える。

戦国時代奥平氏は今川氏に属したが、貞能が出るに及んで松平氏に属し、今川氏真の没落に力を尽した。のち一時甲斐の武田氏に仕えたが、長篠の戦に当っては徳川家康に

應じて功を樹てた。貞能の子信昌は家康の女亀姫を娶り、

のち下野国宇都宮、下総国古河、出羽国山形、丹後国宮津などを経て一七一七（享保二）年昌成は豊前中津十萬石に移り、世々相伝えて明治に至り伯爵となる。なお、信昌の四男忠明は家康の外孫に当るため、松平の称を賜い一家を立て、はじめ伊勢国龜山を領したが、各地に転じ九世忠堯に至り武蔵国忍十萬石を領した。

定家—貞俊—貞久—貞昌—貞勝—貞能

信昌—家昌—忠昌—昌能—昌章—昌成

忠明（武蔵忍藩主松平租）

昌敦—昌鹿—昌男—昌高—昌暢—昌猷

昌昭—昌遇

豊後杵築藩（河出書房 日本歴史大辞典）

松平氏。能見松平氏。信光の九男光親を祖とし、三河額田郡能見村に起る。その孫重吉が家康の家人となり、子重勝のとき忠輝郷の家老として一六一一（慶長十六）年越後三条で二万石、一七（元和三）年に下総関宮で三万石、一九年に遠江横須賀へ移封。二二年に子重忠が出羽上ノ山で四万石、二五（寛永二）年に嗣なくして絶家すべきを、小笠原秀政の子に継がしめられ三万石に削られ、養嗣子重直は撰津三田さだに移封、三二年に豊後竜王で三万七千石、英勝が四三（寛永二〇）年襲封のとき五千石を同弟に分けて三万二千石、四五（正保二）年杵築へ移された。一〇世世襲して一六世親貴のとき廃藩置県となった。

光親—重親—重吉—重勝—重忠—重直

英親—重栄—重休—親盈—親貞—親賢

親明—親良—親貴

〔読史総覧〕

英親—重栄—重休—親純—親盈—親貞

親賢—親明—親良—親貴

1. 英親—長門、市正、従五位下、直次、重頼、宗閑、寛永

二十襲封、正保二杵築に移る。

2. 重栄—千勝、主馬、丹後守、日向守、従五位下、直之、

重実、浄山、元禄五家督

3. 重休—伝三郎、市三郎、民部少輔、豊前守、従五位下、

重形、宝永五家督

4. 親純—吉五郎、市正、従五位下、重交、新庄直詮の五男、

正徳五、十、二襲封

5. 親盈—千之助、市正、对馬守、但馬守、従五位、元文四、

四、九襲封

6. 親貞—千之助、雄之助、筑後守、従五位下、親栄、明和

四、八、十四家督

7. 親賢—民之助、駿河守、従五位下、親盈の二男、天明五、

四、十一養子、同五、二十三家督

8. 親明日直之助、備中守、志摩守、從五位下、親貞の四男、

享和元、四、十三養子、同二、十一、二十襲封

9. 親貞日滝之助、河内守、市正、対馬守、大隈守、中務大

輔、文政八、十二、二十九襲封

10. 親貞日祿之助、但馬守、河内守、慶応四家督、杵築藩知

事

豊後日出藩（河出書房 日本歴史大辞典）

木下氏。諸国に木下氏は多いが、豊臣秀吉の生家木下氏と彼の妻（北政所）の実家杉原姓木下氏とが有名である。秀吉の父木下弥右衛門は、織田信長の父信秀に仕える足軽で、かたはら農業を営んだというから相当の百姓であったのだろう。秀吉は一五七二（元龜三）年ごろ改めて羽柴を称したらしく、一五八五（天正一三）年九月（翌年一二月ともいう）豊臣の姓を称した。

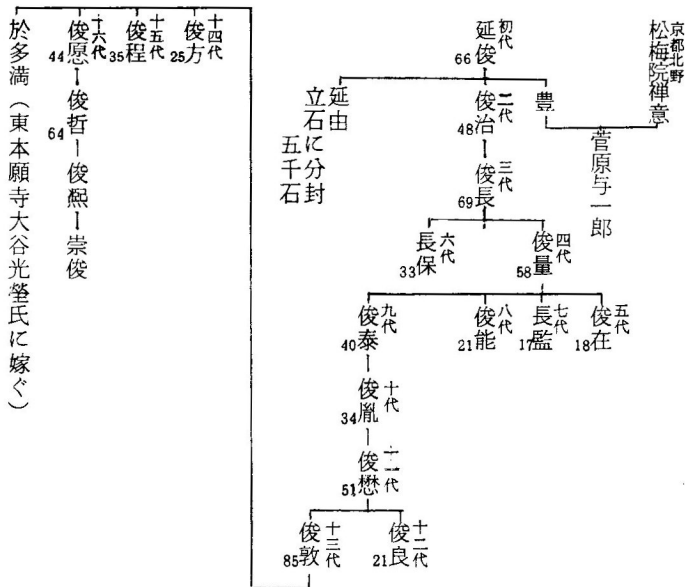
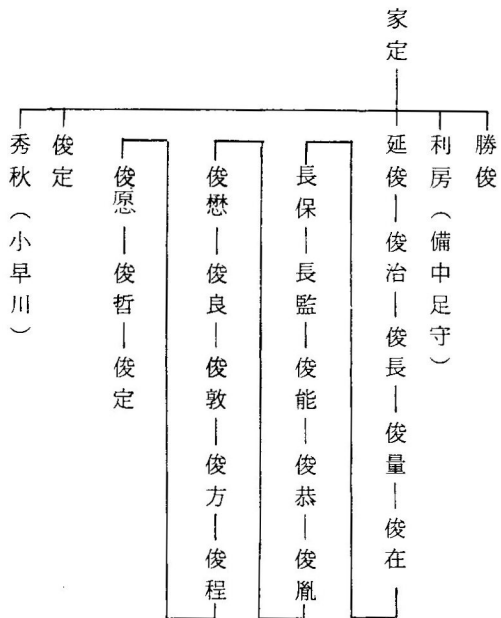
一族のものもそれらに應じて改称した。秀吉の妻の実家の杉原氏は桓武平氏と称しているが、実は播磨の一小土豪であったらしく、彼女の祖父の家利のとき同国龍野から尾張朝

日村に移ったという。

その子家次は早くから秀吉に仕え、一五八一（天正九）年の鳥取城包囲戦のころからその名があらわれた。本能寺の変後京都奉行、近江坂本城主、ついで丹波福知山城主となり秀吉則近に重きをなした。その死後妹婿の家利が杉原家をついだ（秀吉の妻の父）。

その長男家定は木下氏のち羽柴氏を称し、また豊臣の姓を許され、播磨に領地を与えられた。秀吉の死後徳川家康に近づき、一六〇〇（慶長五）年播磨姫路に封じられ、翌年備中足守に移った。彼の長男勝俊（有名な家人の長嘯子）は、秀吉から若狭小浜に封じられていたが、関が原戦に去就に迷い、ついに領地を没収され、次男利房が家をついだ。以後子孫あいついで足守城主二万五千石を領した。十二代利恭のとき版籍奉還、ついで子爵を授けられた。歌人の木下利玄（としはる）は利恭の甥で、その養子である。

前記家定の三男延俊は関が原戦で徳川氏につき、その功で豊後日出に封じられ、足守の木下氏と同じく明治維新に及び子爵を授けられた。



豊後府内藩 (河出書房 日本歴史大辞典)

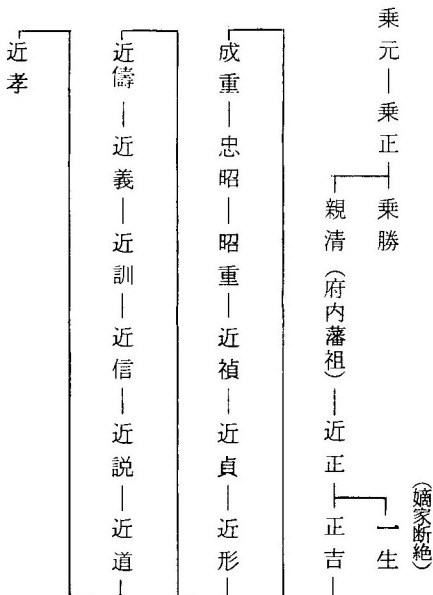
大給氏、寛政系図その他によれば加賀守乗元は松平親忠の二男で三河国賀茂郡大給に住し、その子孫を大給氏または大給松平氏を称するとするが、また一説には物部尾輿の裔秀定が源頼朝より三河国賀茂郡荻生庄の地頭に補せられ、その子孫荻生氏を称し、一世の孫秀統は松平信光と戦って敗れ、その孫乗元は松平親忠の婿になるといふ。

乗正の三子親清の子近正は一六〇〇(慶長五)年石田三成の軍を伏見城に防いで戦死したため功によりその子一生は下野国板橋に一万石を賜う。子成重は大阪の陣の功により一六一七(元和三)年二万石に増封されて三河国西尾に移り、のちさらに丹波国亀山、豊後国鶴崎などを経て五八(明暦四)年同国府内二万二千二百石に移り、代々相承けて明治に至り子爵に列する。

大給松平乗元の二男親清を祖とする分家。家康の家人となり、四世近正のとき上野三ノ倉で五千石、一六〇〇(慶長五)年

に伏見城で戦死。子一正家康に近侍して功あったが一六〇六(慶長一一)年勘気を受けて絶家。弟正吉が下野板橋で家

を継ぎ、子成重のとき一七(元和三)年に三河西尾で一万三千石、二一年丹波亀山で二万三千石。子忠昭幼くして豊後鶴崎へ転封、長じて一六五八(万治元)年豊後府内に移る。近陣のとき七六(延宝四)年新田と合せて所領三千石を両弟に分けて本領二万一千石。世襲して十四世近説に至った。



乗元—乗正—親清—近正—一生—成重—

忠昭—近陣—近禎—近貞—近形—近儔

近義—近訓—近信—近説—近道

1. 忠昭—太郎左衛門、左近將監、從五位下、如月、寛永十

龍封、同十一、閏七、六豊後亀川に移る。万治元、

二、二十七豊後府内城

2. 近陣—虎之助、大藏主膳、筑前守、对馬守、從五位下、

昭重、如元、延宝四、三、二十七襲封、

3. 近禎—巳之助、筑前守、右近將監、对馬守、相模守、從

五位下、昭貞、昭因、近治、宝永二、十一、十一

家督

4. 近貞—兵庫、内記、主膳正、对馬守、從五位下、昭峰、三

宅康男の次男、正徳二、正、二十七養子、享保十、

十、十八襲封

5. 近形—大藏、五左衛門、主膳正、從五位下、近房、延享

二、九、十八家督

6. 近儔—秀之助、五左衛門、長門守、從五位下、明和七、

七、二十一家督

7. 近義—近弥、主膳正、從五位下、近儔の弟、享和四家督

8. 近訓—起之助、五左衛門、左衛門尉、從五位下、閑山、

近義の弟、文化三養子、同四、十襲封

9. 近信—主税助、信濃守、從五位下、松平利幹の次男、天

保二家督

10. 近説—猶之助、五左衛門、左衛門尉、從五位下、松平定

和の弟、天保十二、七襲封、明治元、三、二十大

給と改姓、府内藩知事

11. 近道—金之丞、起之助、増沢虎之丞の男、明治元、十二、

二十八養子

豊後白杵藩 (河出書房 日本歴史大辞典)

稲葉氏。伊与河野氏の裔。河野氏の本宗は第五七世通直の孫五九世通直に至って断絶した。五七世通直の末子塩麿(通貞)は一時僧籍にあつたが還俗し美濃の土岐氏に仕え

て稲葉山城に拠り、稲葉氏の祖となる。子通則はその子五人とともに討死をしたので長良崇福寺の僧であった末子一鉄（良通、長通）が帰俗して齊藤氏に仕え西濃三人衆の一人と称された。

のち織田信長、豊臣秀吉に歴任し、度々の合戦に軍功を立てた。嫡子貞通は秀吉に仕え美濃国郡上郡を領したが、関方原の役に際しては、はじめに西軍に属し、のち東軍に味方して二六〇〇（慶長五）年豊後臼杵五万石を賜った。そのち子孫相承、第一四世久通のとき廃藩置県となり華族に列せられた。

河野通直

通宣(58) — 通直(59)
通貞（塩塵） — 通則 — 一鉄（良通）

貞通 — 典通 — 一通 — 信通 — 景通 — 知通 — 重通

恒通 — 董通 — 泰通 — 弘通 — 雍通 — 尊通

幾通 — 観通 — 久通

〔読史総覧〕

越知通貞 — 通則 — 良通 — 貞通 — 典通 — 一通 —

信通 — 景通 — 知通 — 恒通 — 董通 — 泰通 —

弘通 — 雍通 — 尊通 — 幾通 — 観通 — 久通

1. 貞通日彦六、右京亮、侍従、従五位下、慶長五日杵五万六千石

2. 典通日童名虎、彦一、彦六、侍従、従五位下、慶長八日襲

封

3. 一通日童名亀、彦四郎、民部少輔、従五位下、寛永四日襲

封

4. 信通日童名虎、彦四郎、従五位下、寛永十八日襲封

5. 景通日虎助、右京、右京亮、従五位下、延宝元日襲封

6. 知通日初め通同、市正、能登守、従五位下、信通の男、

天和元嗣、元禄七襲封、

7. 恒通日彦六、飛騨守、伊予守、従五位下、宝永三日襲封

8. 董通日中務、能登守、刑部少輔、伊勢守、従五位下、

享保五襲封

9. 泰通トキトキ 初め治通、万次郎、民部、右京亮、能登守、從五位下、元文二襲封

10. 弘通ヒロトキ 初め副通、亀太郎、能登守、從五位下、明和五襲封

11. 雍通オウトキ 初め虎次郎、伊予守、從五位下、寛政十二、九家督

12. 尊通ソントキ 初め虎太郎、從五位下、伊予守、文政三、五家督

13. 幾通キイトキ 初め辰二郎、從五位下、備中守、能登守、尊通の弟、文政四、十二襲封

14. 観通カントキ 初め從五位下、伊予守、尊通男、弘化元、七襲封

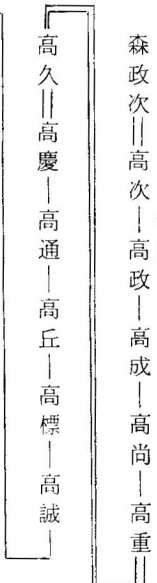
15. 久通キウトキ 善之丞、虎二郎、從四位下、右馬亮、文久二、十二襲封、臼杵藩知事

豊後佐伯藩(佐伯市史)

毛利氏。宇多天皇第八の皇子敦実親王の曾孫佐々木左近將監成頼に出づ。成頼十四世の孫、佐々木四郎高久に至り三井出羽守藤原乗定の嗣となる。依って源姓を藤原姓に改む。

また、江川愛智郡鯉江城に居るを以て佐々木氏を改め鯉江とす。その子高昌、足利義尚に事ふ。その子義堯子無きを以て、三条大納言為定を養嗣とす。その孫定春の時、天正元年鯉江城寇賊のため破られたるを以て、同国鯉江荘の内森村に居す。因つてまた氏を森と改む。定春豊臣秀吉に事ふ。秀吉食邑を摂州に賜ふ。定春卒し、その弟政次嗣ぐ。政次卒し高次嗣ぐ。九郎左衛門尉と称し、更に尾州茹安加に封ぜられ、移りて此に居す。而して高次高政を生む。是れ毛利氏の祖なり。

(毛利)



高翰—高泰—高謙—高範

高政（幼名勤八郎、民部大輔友重、後伊勢守高政）

高成（勤八郎、撰津守）

高尚（市三郎、初高直、伊勢守）

高重（主膳、安房守）

高久（韮負、駿河守、久留島通清三子）

高慶（千代熊、助十郎、高定、高寛、高慶、周防守、久留島通清五子）

留島通清五子

高丘（寅太郎、徳高、周防守）

高標（彦三郎、高代、高猷、高標、和泉守後伊勢守）

高誠（岩之助、高聴、高明、高誠、美濃守）

高翰（榮菊、榮之助、初若狭守後豊前守）

高泰（岩之助、出雲守）

高謙（榮二郎、岩之助、初伊勢守後安房守）

高範（侃次郎、細川行真子、初美濃守後伊勢守）

豊後竹田（岡）藩（河出書房 日本歴史大辞典）

中川氏。本姓清和源氏多田氏族。源頼光の曾孫多田明国

にはじまり、その後裔清村は嗣子清照が早世して男子がな

かったため、平良文の裔平重利の二男重清にその女を配し

て家を譲る。重清の子清秀は一五六八（永禄一一）年織田信長が上洛するや、それに属して撰津国茨木城を与えられ、四万石余を領した。信長の死後は豊臣秀吉に従い、山崎の合戦には秀吉の先手となって明智光秀と戦い、八三（天正一一）年賤ヶ岳の合戦に討死をした。その子秀政は、父の功により信長より播磨国三木城を賜い、のち秀吉に属して朝鮮の役に討死をした。

その弟秀成は家を嗣ぎ、のち豊後国竹田城（岡城）を賜い七万四百石を領し、関ヶ原の役には東軍に忠じて旧領を安堵、子孫相承して明治に至り伯爵となる。

清村—清照—重清—清秀—秀政—秀成—

久盛—久清—久恒—久通—久忠—久慶—

久貞—久徳—久持—久貴—久教—久昭—

久成—久任

〔中川氏年譜〕（北村清士著中川史料集目次による）

- 太祖 清秀公（天文十一年～天正十一年）
二世秀政公（永禄十一年～天正二十年）
三世秀成公（元亀元年～慶長十七年）
四世久盛公（文禄三年～承応二年）
五世久清公（慶長二十年～天和二年）
六世久恒公（寛永十八年～元禄八年）
七世久通公（寛文三年～宝永七年）
八世久忠公（元禄十一年～寛保二年）
九世久慶公（宝永五年～寛保三年）
第十世久貞公（享保九年～寛政二年）
第十一世久持公（安永五年～寛政十年）
第十二世久貴公（天明七年～文政七年）
第十三世久教公（文化十二年～天保十一年）
第十四世久昭公（天保十一年～明治二年）
第十五世久成公（明治二年～明治四年）

豊後森藩（河出書房 日本歴史大辞典）

久留島氏、もと来島氏。家系は明らかでない。河野氏の

一族といい、源氏ともいい、野島の村上氏の一族ともいう。伊予来島を有して来島氏を称した。

来島通康は河野通直に属し、通直の女を妻とし、主家の復興に尽し、一五六七（永禄一〇）に卒した。

通康の子通総、村上氏を改めて来島氏を称したともいわれる。その後又来島を改めて久留島を称した。通総の子通親、徳川家康に仕え、豊後玖珠郡森に封じられて大名となり、子孫明治に至り華族に列せられた。

通康—通総—康親—通春—通清—通政—光通—

通祐—通同—通嘉—通客—通明—通胤—

通靖—通簡—